（城西人文研究第 23・24 巻合併号）

Passion と Virtue の構成

——*Eloisa to Abelard*——

石　川　郁　二

I

Abelard と Eloisa は 12 世紀に実在した人物である。Abelard は 1079 年にフランスの北西部にあるブルターニュ半島で生まれた。哲学者，神学者として著名な彼は，40 歳に手が届く頃，当時 18 歳だった Eloisa と恋に落ちた。ある不幸な事件のため二人は世を捨てそれぞれ別な修道院に入ったが，ふとしたきっかけから Abelard の書簡が Eloisa の手に入り，その後，二人は書簡を交わすようになった。この書簡集は仏語訳などで人々に広く読まれていた。

Alexander Pope の *Eloisa to Abelard* は，John Hughes の英語訳に基づいて書かれている[(1)]。Pope のこの作品は二人の書簡集という形ではなく，Eloisa から Abelard 宛に書かれた一通の書簡詩という形をとり，Eloisa の「愛に苦悶する心」と「敬神の心」の葛藤を詩に歌ったものである。

この小論は，virtue と passion に基づいて *Eloisa to Abelard* の各スタンザを分類し，作品を解明しようとしたものである。*Eloisa to Abelard* は全体で 24 のスタンザからできている。意味の上で virtue と passion に分類したスタンザが作品の中でどういう割合で配置されているか，そして，各スタンザがどのような構成になって作品が進展し，主題と結びついているかを調べたものである。

II

Eloisa to Abelard には，Abelard への愛をなかなか諦めきれない Eloisa の激情が随所に見られる。Eloisa の感情が高ぶると，必ずと言ってよいほど，激情に対する反省が見られ，節制が Eloisa の心に起こっている。

この小論ではスタンザの分類をあまり多くすることなく，論点を絞るために，スタンザを Passion と Virtue に，そして単一のスタンザの内容だけではそのどちらにも入れがたいスタンザとに分類し，分析しようと思う。その為，passion と virtue の意味に幅を持たせ，Passion に属するスタンザには，激情に至る愛に苦悩・苦悶する Eloisa の状態，つまり，Eloisa の本性が愛を求めるすべての描写を含めている。そして，Virtue に属するスタンザには，節制を含めた敬神の心，つまり，Eloisa の神を求める心と恩寵のすべてを含めるものとし，Passion と Virtue という表現で大文字を頭文字に使用して論を進めている。作品の中で，passion は nature と，virtue は grace と深く結びついていることは，この作品の "The Argument" に記されている[(2)]。

修道院にいる Eloisa が，Abelard のことを慕い，愛に我を忘れるということは，情欲におぼれ，神を蔑ろにしていることであり，神への反抗を意味するものである。作品では，その激情の後に自分自身への反省が起こり，自己を節制すると共に敬神の心が頭を持ち上げているのである。

Eloisa の現在の境遇を考えれば，修道院という世俗と決別した世界で，許されない世俗の愛に身をやつしているのであり，許されないものを求めれば求めるほど，Eloisa の愛はそれだけ燃え上り，苦悩する結果となっている。

この作品は，24 のスタンザから成り立っている。第 1 スタンザから第 24 スタンザまで，Passion と Virtue に基づいて調べてみよう。

第 1 スタンザ（1〜8 行）——Prologue

最初のスタンザは prologue であり，Eloisa が現在生活している修道院

について歌われている。陰気な感じがする修道院には瞑想と憂鬱があると描かれている。この描写は，Abelard と離れて暮らす Eloisa が宗教生活にまだ心の平安を見い出していないことを表している。Eloisa の心の中には未だに Abelard への想いが脈々と息づいているのである。7 行目と 8 行目の二行連句で Abelard からの手紙を暗示し，彼の名前というもので第 2 スタンザへつながっていく。

第 2 スタンザ（9〜16 行）——Passion

Eloisa は Abelard の名前を隠そうとするのだが，彼女の手が自然と彼の名前を書いてしまう。

第 3 スタンザ（17〜28 行）——Passion

修道院の自分の部屋で，Eloisa は溜息をもらし，愛に苦しんでいる。Abelard の冷たい仕打ちに比べて，今でも Eloisa の心の半分は彼への切ない想いに占められ，お祈りと断食でも愛する気持を完全には抑制できないでいる。

第 4 スタンザ（29〜40 行）——Passion，Virtue

Abelard の手紙を読む Eloisa は嬉しさに打ち震えるが，その背後に潜んでいる「ある恐ろしい不運」（34 行）をちらりと思う。そして，手紙を一行一行読みながら，感傷的な涙を流している。34 行目にある “Some dire misfortune” そして 36 行目にある “a sad variety of woe” は，Abelard との愛を熱望する Eloisa の心に生じたものであり，神を裏切っているという良心の呵責の現れである。また，この Virtue は，今後進展する方向をも暗示している。

第 5 スタンザ（41〜48 行）——Passion

どんなことでも手紙に書いて知らせてくれることを Abelard に望む

Eloisa は，そうしてくれない Abelard を思いやりがないのではないか，と悩む。Eloisa は手紙を読みながら涙している。Abelard との愛に前向きな Eloisa が描かれている。

第 6 スタンザ（49〜58 行）——Passion

Eloisa は Abelard の痛み・嘆きを共に感じたいと望んでいる。彼の手紙で愛に再び生気を与えられた Eloisa は，二人の魂の深い交わりを熱望している。

第 7 スタンザ（59〜72 行）——Passion

Abelard と初めて会った時のことが歌われている。そして，Eloisa は Abelard から「愛することは罪ではない」と教えられる。Eloisa は Abelard のためなら神を失ってもよいとまで思う。

第 8 スタンザ（73〜98 行）——Passion

結婚について Eloisa は考える。愛に比べれば，富や名誉等は価値がないに等しいものだと思う。愛する人の妻になることを望んでいる Eloisa はお互いが惹かれ合い，自由に愛することができることを望み，相思相愛ということが幸せな状態だと述べている。

Oh happy state! when souls each other draw,
When love is liberty, and nature, law:
All then is full, possessing, and possest,
No craving Void left aking in the breast:
Ev'n thought meets thought ere from the lips it part,
And each warm wish springs mutual from the heart. (91-6)

このような二人の関係が至福の状態であり，以前の Abelard と自分はそ

うであった，と Eloisa は語っている。

第 9 スタンザ（99〜106 行）——回想

2 人が相思相愛であった時に Abelard が被った過去の不幸な事件について回想している。このスタンザは，第 8 スタンザで述べた天上の喜びともいえる相思相愛の時に起こった事件を扱っている。Passion と思われる直接的な描写はないが，2 人が離ればなれになった原因に結びつく事件であり，現在の愛の激情を引き起こす原因の 1 つと言っても差し支えないであろう。どちらかと言うと Passion の区分に入るであろうが，無理に 2 つのどちらかの分類に入れないで，回想ということにしておく。

第 10 スタンザ（107〜128 行）——Passion, Virtue

Eloisa が修道女になる誓いをし，聖なるベールに口づけをした時，神も聖者たちもその誓いが Eloisa の真心から出たものだとは信じていなかった。修道女になった時でも Eloisa の望みは Abelard との愛だけであった。Eloisa が Abelard との愛に溺れ，Eloisa の本性が自由を得て，楽しかった過去の思い出に浸っている時，反省の心が芽生え Eloisa は神のことを考え始める。

Ah no! instruct me other joys to prize,
With other beauties charm my partial eyes,
Full in my view set all the bright abode,
And make my soul quit *Abelard* for God. (125-8)

Eloisa の心に，神のために Abelard を諦める，という思いが初めて生じるのである。しかし，この時点の Eloisa はまだ自分から彼を諦めようとは考えていない。自分の魂に Abelard を諦めさせよ，と Eloisa は願っているのである。心に節制が芽生えたとはいえ，気持の上では Abelard を

慕っており，まだ本物の敬神とは言えないだろう。

第 11 スタンザ（129〜170 行）——Passion

現在 Eloisa が暮らしている修道院は Abelard が建てたものである。その修道院とその周囲の描写が続き，成就されない愛に苦悩する Eloisa の姿が歌われている。愛の激情と言えるほどに高まる描写はこのスタンザには見られないが，神にではなく Abelard に想いを寄せる Eloisa の気持が描かれており，やはり Passion の分類に入るだろう。

第 12 スタンザ（171〜176 行）——Virtue

Eloisa は修道院で修道女として永遠に留まらなければならないと観念している。そして死のみが自分の苦悩を解決できるという気持になり，「Abelard と交わるのが罪ではなくなるまで」待とうと思う。Abelard との愛自体を諦めたわけではないが，肉体的な愛を求める気持は，一時的にせよ，Eloisa の心から無くなっている。純化された愛に変化しつつあることが感じられる。Eloisa は Abelard から神のほうに一歩近付いているのである。このスタンザは，愛が純化されつつあることを感じさせるものであり，Virtue のほうになるだろう。

第 13 スタンザ（177〜206 行）——Virtue, Passion, Virtue

神に救いを求めるが，その気持が敬神から起こったものなのか，絶望からなのか，Eloisa にはわからない。

Assist me heav'n! but whence arose that pray'r?
Sprung it from piety, or from despair? (179-80)

ただ，神に救いを求める気持が起こったということは，彼女の中で変化が現れているのである。しかし，魂が安らかな状態になる前に，望み・絶望・

憤慨・後悔・隠蔽・軽蔑を繰り返し経験してもよいが，忘却だけはしたくないと Eloisa は考えている。しかしスタンザの最後では，Abelard を慕う気持より神を想う心のほうが強くなっている。

Oh come! oh teach me nature to subdue,
Renounce my love, my life, my self——and you.
Fill my fond heart with God alone, for he
Alone can rival, can succeed to thee. (203-6)

第 14 スタンザ（207～222 行)——説明

清廉潔白な Vestal のことを思い，その状態を羨ましがっている。このスタンザは Vestal に関することだけで，Abelard には言及されていない。Vestal の Virtue である。Vestal の幸せな運命を描写することによって，暗黙の内に，それを求めたいという Eloisa の気持を表すと共に，Eloisa の現在の状態と対比させ Eloisa の不運を目立たせている。どちらかというと Virtue の記述だが，分類は説明としておく。

第 15 スタンザ（223～248 行)——Passion

Eloisa は Abelard を夢に見る。第 14 スタンザとは対照的に，悪魔が彼女の抑制心をすべて取り除き，愛が自由奔放に動き出す。彼女の良心は眠り，彼女は愛の激情に身を任せる。目覚めると目の前にいた Abelard の幻は離れて消え去ってしまう。もう一度楽しい夢を見るために彼女は眼を閉じるが，同じような夢を見ることはもうできない。245 行と 246 行で，Abelard が天空から Eloisa を手招きするが，2 人の間を雲が遮り，波が起こり，風が吹き出す，という描写がある。これは Eloisa が無意識の内に Abelard と添い遂げられないとわかっており，二人の考えがもはや一致していないことを，そして Abelard の心がすでに神の下にあると Eloisa は思っていることを表している。そして目覚めた Eloisa はまた悲

嘆にくれる。

第 16 スタンザ（249〜256 行）——説明

Abelard のことを Eloisa は考えている。現在の Abelard は愛に高鳴る鼓動も，燃える血潮もなく，穏やかに平静を保っているように Eloisa には思われる。このスタンザは次の第 17 スタンザを導く前置きである。現在の Abelard についての説明としておく。

第 17 スタンザ（257〜262 行）——Passion

第 16 スタンザでの Abelard の冷たい態度に，Eloisa は業をにやし，自分のところへ来て，自分の愛を受け入れるように望んでいる。Eloisa は Abelard への愛に燃えている。

第 18 スタンザ（263〜276 行）——Passion

四六時中 Abelard の幻が Eloisa の前に現れるようになり，Eloisa が宗教儀式を行っている間にも Abelard の姿が見え，声が聞こえるようになる。朝のお祈り，賛美歌の途中でも愛の空想が躍動し，Eloisa の魂は愛の情火の中で溺れてしまう。

In seas of flame my plunging soul is drown'd,
While Altars blaze, and Angels tremble round. (275-6)

「祭壇は炎を上げ，天使らは震え回る」というこの描写で，宗教は Eloisa の愛に同意していないこと，神に知られたらどうしようという天使の恐れをも表している。そして，炎を上げているという表現は，Eloisa の情火が勢いよく燃え上がっていることをも暗示させる。Eloisa の激情が最高潮になっているスタンザであり，消え入る寸前の閃光のように激情がほとばしっている。

第 19 スタンザ（277～288 行）——Virtue, Passion

第18スタンザで Eloisa の愛の激情が最高潮に達した反動として，Eloisa は謙虚な気持になり涙する。反省し，神に祈り震えている時，Eloisa の魂に神の恩寵が初めて見えてくるのである。

While prostrate here in humble grief I lie,
Kind, virtuous drops just gath'ring in my eye,
While praying, trembling, in the dust I roll,
And dawning grace is opening on my soul.... (277-80)

しかし Eloisa の心は，この現れだした恩寵にすぐに従順になることはない。Eloisa は Abelard に自分を奪ってくれるように頼み，悪魔に手を貸しても自分を神から引き離してくれるように懇願しているのである。愛の最後のもがきが感じられる。

第 20 スタンザ（289～302 行）——Virtue

第 19 スタンザで自分を神から引き離し奪ってくれるようにと懇願した Eloisa は，このスタンザで一転して，Abelard に自分のことは考えないで忘れてくれるようにと願う。恩寵や美しい美徳のことを考え，宗教に生きるという 2 人の誓いが永遠に続くことを望んでいる。Eloisa は永遠の休息につつまれることを願っているのである。Abelard を忘れ，神を受け入れようとする Eloisa が感じられる。

第 21 スタンザ（303～316 行）——Virtue

修道院の独居室で嘆き悲しむ Eloisa に，以前は愛の犠牲者だった精霊が呼びかけているように Eloisa には思われる。精霊が Eloisa に神の下に来るように勧め，神は人間の弱さを許してくれると語りかける。

第 22 スタンザ（317～336 行）——Virtue, Passion, Virtue

精霊の語る「永遠の眠り」の中へ行こうと Eloisa は思う。そして神の国に召される時の宗教儀式を Abelard に頼む。自分が死ぬ時に，口から肉体を離れる魂を Abelard に奪い取ってもらいたいと一瞬考えるが，すぐにそれを否定し，愛欲のない無垢な心になり，神の下に導いてもらいたいと Abelard に願うのである。

第 23 スタンザ（337～342 行）——Virtue

Eloisa は Abelard が亡くなる時のことを考える。光輝く雲が舞い降り，天使が見守り，聖者が Abelard を抱きしめることを思う。このスタンザは Abelard についての Eloisa の望みであり，Abelard の祝福された死を願う Eloisa の思いに愛の激情はもはや感じられない。

第 24 スタンザ（343～366 行）——Epilogue

結びのスタンザで，Eloisa は Abelard と同じ墓に埋葬されることを望む。そして吟遊詩人が 2 人のことを歌うように望んでいる。

III

各スタンザの内容を Passion と Virtue に基づいて調べてみた結果，下記のように分類される。

1. Passion だけのスタンザ
2. Virtue だけのスタンザ
3. Passion と Virtue の両方入っているスタンザ
   a) 最初に Passion がきて，Virtue が後にきているスタンザ
   b) 最初に Virtue がきて，Passion が後にきているスタンザ
   c) Virtue, Passion, Virtue の順番で構成されているスタンザ

4. Passion か Virtue か，そのスタンザだけでは断定できない過去の回想，説明のスタンザ

上記の分類に Prologue の第 1 スタンザと Epilogue の第 24 スタンザを加えると 24 のスタンザ全体が揃う。

第 1 スタンザは作品の導入部であり，第 24 スタンザは結びのスタンザである。それぞれ大切なスタンザではあるが，Passion と Virtue の構成を作品で調べるという小論の目的のために，この 2 つのスタンザは別格とし，除いて考えることにする。

上記の区分に従い，第 2 スタンザから第 23 スタンザまでを分類し，スタンザの数を集計してみると，次のようになる。

1. Passion のみ——10 スタンザ
   第 2，第 3，第 5，第 6，第 7，第 8，第 11，第 15，第 17，第 18
2. Virtue のみ——4 スタンザ
   第 12，第 20，第 21，第 23
3. Passion と Virtue——計 5 スタンザ
   a) 最初 Passion，後が Virtue——2 スタンザ
      第 4，第 10
   b) 最初 Virtue，後が Passion——1 スタンザ
      第 19
   c) Virtue, Passion, Virtue の順——2 スタンザ
      第 13，第 22
4. 過去の回想，説明——3 スタンザ
   第 9，第 14，第 16

「Passion のみ」のスタンザが 22 の内 10 スタンザを占めている。それに引き換え，「Virtue のみ」のスタンザは 4 スタンザにすぎない(3)。

Passion と Virtue が混ざっているスタンザが 5 スタンザある。この混ざっているスタンザを考えると，スタンザの後半部に Passion が記述されている場合は文脈の流れから言って Passion が Virtue より読者の頭に残り，意識の流れから言っても Passion のほうが意識に残る割合がより大きいと言えるであろう。逆に Virtue が後になったスタンザは Virtue のほうが強く意識に残ると言える。

Passion が後になっているスタンザ，3 の b)「最初 Virtue，後が Passion」を「Passion のみ」に加えると，Passion のスタンザは 11 スタンザになる。同様に，Virtue が後になっているスタンザ，3 の a)「最初 Passion，後が Virtue」と 3 の c)「Virtue, Passion, Virtue の順」を「Virtue のみ」に加えると，Virtue のスタンザは 8 スタンザになる。

このようにして分類すると，Passion に属するスタンザが 11，Virtue に属するスタンザが 8，どちらにも入らないスタンザが 3 あることになる。「Passion のみ」と「Virtue のみ」は 10 対 4 で，Passion は Virtue の 2 倍以上の割合になっているが，Passion と Virtue が混ざっているスタンザを加えると 11 対 8 の割合になる。これでも Passion が Virtue を上回っているが，2 倍以上の差があるというわけではなくなる。

「過去の回想，説明」の 3 スタンザをそれぞれ調べると，第 9 スタンザは第 8 スタンザの描写を受けて置かれているもので，前のスタンザの内容の着地点になるものである。第 14 スタンザと第 16 スタンザは，それぞれ次のスタンザへ跳躍するステップ台になっていると言ってもよいだろう。この「過去の回想，説明」のスタンザは，読者が受ける印象としては，前後のスタンザに意味上続いているとは言え，Eloisa の Passion と Virtue の一休みという感じがある。そして作品全体の中では，だいたい中間部に配置されており，作品が Passion から Virtue へ向かうための重要な要素になっている。

ただ，このように機械的に各スタンザの数を調べるということだけではあまり意味がないように思われる。

スタンザというのは，1 つの意味のまとまりを表していると共に，前後のス

タンザとの関係から配置されているものである。そして，各スタンザの関連，連動で筋が展開し，作品全体の流れができているものである。だから，スタンザの数だけで考える，または1つのスタンザだけを取り出してそれだけで考えるというのは，木を見て森を見ず，になってしまう恐れがある。スタンザは作品全体の各部分という考えで，各スタンザの流れを追っていかなければならないだろう。

スタンザの流れ，前後関係ということで，各スタンザの一覧表を下記に作成した。

スタンザ	行数	内容			
第1スタンザ	8	Prologue			
第2スタンザ	8	Passion			
第3スタンザ	12	Passion			
第4スタンザ	12	Passion	Virtue		
第5スタンザ	8	Passion			
第6スタンザ	10	Passion			
第7スタンザ	14	Passion			
第8スタンザ	26	Passion			
第9スタンザ	8	回想			
第10スタンザ	22	Passion	Virtue		
第11スタンザ	42	Passion			
第12スタンザ	6		Virtue		
第13スタンザ	30		Virtue	Passion	Virtue
第14スタンザ	16	説明			
第15スタンザ	26	Passion			
第16スタンザ	8	説明			
第17スタンザ	6	Passion			
第18スタンザ	14	Passion			
第19スタンザ	12		Virtue	Passion	
第20スタンザ	14		Virtue		
第21スタンザ	14		Virtue		
第22スタンザ	20		Virtue	Passion	Virtue
第23スタンザ	6		Virtue		
第24スタンザ	24	Epilogue			

上記の表を見て，すぐに気付くことは，前半に Passion が多く，後半から結末に向かって，明らかに Virtue が多くなっていることである。Passion と Virtue が混ざっているスタンザが途中に幾つか散在しているが，作品全体の流れから見て，最後に向かうにつれて Passion から Virtue へと移り変わっていく Eloisa が感じられるのである。

作品全体から見ていくと，第 13 スタンザまでで Passion と Virtue の関係に 1 つのまとまりがあるようだ。Passion が多く描写されている前半に比べて，第 10 スタンザから第 13 スタンザにかけて Virtue の描写のほうが多くなるということがわかる。そして，第 13 スタンザの最後で Eloisa の心は Abelard よりも神を敬うほうへと傾いているのである。

さらに，第 14 スタンザから第 23 スタンザまでを見ると，説明のスタンザが 2 つ入っているものの Passion の描写がある前半から，後半になると Virtue が多くなる。

作品全体を大きく 2 つに分けると，前半部が第 13 スタンザまで，後半部が第 14 スタンザから，と言えるだろう。

第 2 スタンザから第 8 スタンザまでを調べると，第 4 スタンザの後半部に Virtue の描写が入っているものの，ほとんど Passion が続いている。これは，愛する Abelard の名前を我知らず書いてしまうという設定から始まって，Eloisa の現在の状態，心の渇望，Abelard との出会い，結婚についての Eloisa の考え等，Abelard に対する Eloisa の愛を読者に知らせる役割を負っているのである。

第 4 スタンザの Virtue についての記述はそれほど強いものではない。Abelard を慕っている Eloisa の心に現れたちょっとした不安であり，深刻に神のことを思うというものではない。Passion の描写が続く中で，このままの状態で愛が発展し円満解決の結末を迎えるものではない，という一種の予告のようなものである。

第 9 スタンザの回想に記されている事件は，第 8 スタンザで述べられている相思相愛の状態に 2 人がいた時に起こった事件であり，現在の離ればなれになっ

た経過を知らせているものである。この第9スタンザは，第8スタンザまで続いてきたPassionが一度休むような感じを与える。EloisaのPassionから読者の目を一時逸らせるのである。

第2スタンザから第23スタンザまでの22のスタンザの内，第2スタンザから第9スタンザまでは約3分の2を占めていることになる。

第9スタンザでAbelardの過去の不幸な事件を描写した後，同じく過去のことではあるが第10スタンザでEloisaが修道女の誓いをした時のことに話題を変えている。第8スタンザまでと第10スタンザ以降とでは，Passionの調子が変わり，感情の高ぶりが増しているように思われる。

第10スタンザから徐々にVirtueの描写が多くなる。次の第11スタンザにPassionが1つあるものの，第12スタンザ，第13スタンザとVirtueが続いていく。

PassionとVirtueが混ざっているスタンザは，Virtueの盛り上がりにとってPassionが重要な要素になっている。*An Essay on Criticism* の中に次のような二行連句がある。

> As Shades more sweetly recommend the Light,
> So modest Plainness sets off sprightly Wit.... (301-2)

影が光を，控えめな素朴さが才能をより引き立たせる，つまり，反意語，そして反対のイメージを持つものが，相反するものの特質を目立たせる効果があるということである。このことは，PassionはVirtueを際立たせる役を果たしているし，VirtueはPassionを燃え上がらせるのに効果があると言える。

第19スタンザの最後の行に使われている“the Fiends”と“my God”（288行）は正反対の言葉である。悪魔たちに手を貸しても自分を神から無理にでも引き離して自分を奪ってくれるように，EloisaはAbelardに懇願している。両極端な言葉を同じ行で使い，激情を強く表している。

これは単語や句単位のことだけではなく，1つのスタンザの中にPassionと

Virtue が入っている場合でも，スタンザ単位で考えても，同じ効果が期待できるのである。

第 13 スタンザで，Eloisa は神に救いを求める。その後，愛の奴隷になった者が経験する「望み・絶望・憤慨・後悔・隠蔽・軽蔑」をしてもよいが「忘却」だけはしたくないという Passion の描写がある。そして反省が起こり，Virtue の描写へと変わっていくのである。Passion の激しさが強くなればなるほど，その次に描かれている敬神の心を強く感じさせるのである。

スタンザとスタンザに関していえば，例えば，第 14 スタンザで清廉潔白な Vestal の説明をした後，第 15 スタンザで Eloisa の愛が夢の中で自由奔放になり，Eloisa は愛の激情に身を任せているのである。この第 14 スタンザの説明は，Vestal の Virtue だが，この Virtue が次の第 15 スタンザと対照をなし，Passion を強めている。そして，その描写は読者をも愛の激情に誘い込むのである。

さらに，第 18 スタンザで宗教儀式の最中にも Abelard の幻が現れ，Eloisa の Passion が最高潮に達した後，第 19 スタンザでは謙虚な気持になり震えている Eloisa が前半に描写されている。その振幅の幅が大きいほど，Eloisa の Virtue は真実味を帯び，敬虔な気持へと駆り立てられる Eloisa に必然性が伴い，読者を納得させるのである。

第 2 スタンザから第 23 スタンザまでの内，第 10 スタンザから第 18 スタンザまでの中間部は約 3 分の 2 を占めていることになる。

作品の中間部以降，Passion から Virtue へ，Virtue から Passion へと変わり，揺れ動く乙女心を的確に表現しながら，神に近付く Eloisa を描写している。

第 19 スタンザから Virtue の描写が急に多くなる。神のことを考え恩寵を望む第 20 スタンザ，そして，精霊が Eloisa に神の下に来るように勧める第 21 スタンザ，Virtue の分類に入るこの 2 つのスタンザで，作品の最後の結末への準備が整ったことになる。そして第 22 スタンザでは Virtue, Passion, Virtue と，ちょっとした Passion を Virtue の中に挟み込み，すぐにその最後

の Passion を自分自身で否定することにより Eloisa の愛は純化されたものになっていく。Eloisa が神に従順になっていることを歌っている。

第 19 スタンザから第 23 スタンザまでの後半部は作品全体の約 3 分の 1 を占め，結末のスタンザ群を構成している。

Eloisa の魂が神に救われるかどうか，という問題は，作品の中ではっきりとは書かれていない。しかし，第 23 スタンザで Eloisa は Abelard のことを考え，Abelard が聖者たちに抱かれるということを望んでおり，このことは Eloisa の未来をも暗示しているように思われる。

宗教生活を送っている修道女には許されない事柄が多いであろう。異性との愛に我を忘れ，神を蔑ろにすることは大罪の 1 つである。この作品の背景には，大罪を犯しているということが大きく横たわっており，この「許されないこと」「してはならないこと」を行っているという Eloisa の良心の呵責が，愛の苦悩，煩悶を引き起こす大きな要因になっていることは確かである。

Pope はそれを踏まえて，この作品の中に Passion と Virtue のスタンザを効果的に配置し，主題を表現するのに最も適する構成で作品を作り上げているのである。

IV

Alexander Pope の *Eloisa to Abelard* を，24 あるスタンザに重点を置き，分析してみた。

第 2 スタンザから第 23 スタンザまでを，Passion のみのスタンザ，Virtue のみのスタンザ，Passion と Virtue の両方が入っているスタンザ，回想または説明のスタンザに分類し，さらに回想または説明を除いて他のスタンザを Passion と Virtue の 2 つに大きく区分してみると，その配分と配列に無視できないものがあることがわかった。

作品の最初に付けられている “The Argument” の中で述べられている主題を表現する上で，一番よいスタンザ構成を Pope は考え，Passion と Virtue

の各スタンザをうまく配分，配列しているのである。

まず，Passion から Virtue へ向かうというまとまりで見れば，作品は大きく前半部（第 2 スタンザから第 13 スタンザ）と後半部（第 14 スタンザから第 23 スタンザ）に分けることができる。

Passion, Passion と Virtue, Virtue というまとまりから見れば，Passion に属するスタンザが多い前半部（第 2 スタンザから第 9 スタンザ），Passion と Virtue が混ざりあっている中間部（第 10 スタンザから第 18 スタンザ），Virtue が多くなり結末へと向かう後半部（第 19 スタンザから第 23 スタンザ）と大きく 3 つに分けることができる。そして，第 2 スタンザから第 23 スタンザまでの全体では，Passion が多い前半部に約 5 分の 2，Passion と Virtue が混ざりあっている中間部に約 5 分の 2，Virtue が多い後半部に約 5 分の 1 という比率でスタンザを配分している。

Pope は Passion を作品の前半部に多く配置し，後半部へ進むに従って Virtue の描写が中心になっていくように工夫している。そして，作品の半ばから，Passion と Virtue を交互に描写し，Virtue が Passion を強め，Passion が Virtue を強めるように，効果的なスタンザの割り振りをしているのである。

作品では，Eloisa が Abelard との愛に溺れ，Passion に身を任せれば任せるほど，Virtue へ向かう勢いが強くなっている。しかし，そこにおいても，Virtue だけを続けて描写することなく，Passion の描写も挿入して愛に燃える Eloisa の苦悶する心を表現し，心の葛藤をうまく描き出すことで，作品の意図するところが的確に読者に伝わるように，各スタンザを構成しているのである。

勿論，このようなスタンザの解明だけで，作品の価値を判断できるものでないことは明らかである。しかし，各スタンザが連動して作品の雰囲気を作り出しており，それが必然的に作品の主題を表現する上で大きな役割を果たしていることは確かである。

Passion から Virtue へ向かう Eloisa の心が，スタンザの構成からわかるの

である。

《注》

(1) Geoffrey Tillotson, "Introduction" of *Eloisa to Abelard* in *The Poems of Alexander Pope,* ed. Geoffrey Tillotson (London: Methuen & Co. Ltd., 1972), II, pp. 295-6.

(2) Alexander Pope, *The Poems of Alexander Pope,* ed. John Butt (London: Methuen & Co. Ltd., 1968), p. 252. 作品の冒頭に付加されている "The Argument" の中に *"the struggles of grace and nature, virtue and passion"* とある。尚，この小論で引用する Pope の作品はすべてこの版による。

(3) 参考までに各区分の行数を書いておく。

1. Passion のみ——166 行
2. Virtue のみ——40 行
3. Passion と Virtue——計 96 行
   a) 最初 Passion, 後が Virtue——34 行
   b) 最初 Virtue, 後が Passion——12 行
   c) Virtue, Passion, Virtue——50 行
4. 過去の回想，説明——32行